

## 研究ノート

## 社会福祉士実習におけるケアワークのあり方と利用者理解についての課題

塩田祥子<sup>†</sup>

**要約：**新カリキュラムが導入され、実習内容は、実習生に社会福祉士の業務や役割をみせることに重点が置かれた。そして、実習内容にケアワーク実践を組み込むことに否定的となった。そのことは、ケアワーク実践なしに、実習生が利用者に関わり、関係を築くことを求めている。しかし、実習生がどのように利用者に関わり、利用者の理解を深めていくのか、その方法は明確ではない。そのため、実習においては、ケアワークとの差別化に固執するのではなく、社会福祉士としての利用者理解の方法、視点について具体的に考える議論が必要である。そして、実習生が利用者との関わりを大切にする環境を整えていくことが求められる。それは、実習内容からケアワークを取り除くといった安易なことではなく、ソーシャルワーク、ケアワーク、それぞれの独自性を尊重することにつながる。

キーワード：社会福祉士実習、ケアワーク、利用者理解

## 目次

1. はじめに
2. 実習におけるケアワークの捉え方の変遷
  - 2-1. 多様化する実習内容
  - 2-2. 「ケアワーク実践ありきのカリキュラム」を見直す
  - 2-3. ケアワークとの差別化の限界
  - 2-4. 「ケアワークを実践する」実習から「見る」実習へ—その課題—
  - 2-5. ソーシャルワークの独自性を示す実習へ—その課題—
3. 実習におけるケアワーク実践の意義
  - 3-1. 現場の実情に即した実習
  - 3-2. 利用者理解のための、関わりとしてのケアワーク
4. カリキュラム移行にともなう実習現場の状況と課題
  - 4-1. 利用者との関わり方の変化
  - 4-2. いつの時代も変わらない価値
  - 4-3. ケアワークからの脱却とソーシャルワークの見せ方—その課題—
5. 実習現場にある『とりあえず』の実践
  - 5-1. 明確にならない利用者との関わり方、過ごし方
  - 5-2. 介護現場での社会福祉士実習—その課題—
  - 5-3. 意図した「関わり」の提供へ

<sup>†</sup>同志社大学社会学部嘱託講師

\*2015年12月7日受付, 2015年12月20日掲載決定

- 5-4. 関わりを通しての実習生の模索
- 5-5. 「とりあえずの実践」という省みる対象
- 5-6. ケアワークをどのように捉えるのか－何のためのケアワーク実践か－
6. 求められる実習教育とその議論
  - 6-1. 学びの礎となる「職場実習」～「ソーシャルワーク実習」へ
  - 6-2. 各段階（職場実習－職種実習－ソーシャルワーク実習）のつながりの提示
7. おわりに

## 1. はじめに

本研究の問題提起は、特別養護老人ホーム（以下、特養）に実習に行った学生の「社会福祉士は利用者から遠い存在なのですね」という発言から出発している。巡回指導時に、そのように投げかけられた筆者は、咄嗟に何も返すことができなかった。なぜなら、新カリキュラム導入後、「利用者に近い存在」としての社会福祉士を示すことに戸惑いを感じていたからである。

実際、実習開始すぐ、大半の実習生は指導者から利用者との関わりを求められる。そのため、利用者の生活の場に一定時間身を置くことになるが、それは、介護現場に身を置くことにもつながる。そして、介護職の方々の実践を垣間見ながら、自分なりに利用者とのコミュニケーションをとり、利用者に向き合う体験をしていく。それは、教科書上の『利用者』が自分たちと同じ人であることを体感し、生きる主体者として利用者個々に出会う過程でもある。まさしく、現場でしかできないリアルな体験である。そして、利用者との関わりを築きつつある中で、面接室での対応、家族とのやりとり、外部機関との連携といった相談業務中心の社会福祉士の実践に出会い、さらに、利用者の中から対象者を選び、個別の支援計画を立て、その人に応じた支援のあり方を模索していく。しかし、このような新カリキュラムの流れは、利用者と対面的に充分関わるには時間が少なく、利用者を知るよりも現場に慣れることに気が向き、利用者理解に力を注ぎきれないのではないかという懸念がよぎる。また、実際の社会福祉士の動きを一通り「見る」、「聞く」はするが、社会福祉士がじっくり一人の利用者に向き合う場面に出会うことは少ない。そのことが「利用者から遠い専門職」として映っているのではないかと危惧している。

考えてみれば、社会福祉士実習（以下、実習）では、利用者の生活を「広い視点」で捉え、「社会福祉士は利用者から一歩引いて関わる」といった利用者から離れての動きに焦点が充てられがちであるが、それが具体的にどのような実践なのかは示しきれてはいない。さらに、社会福祉士の利用者理解の方法を提供しないまま、何を見て体験してもらえば、社会福祉士の実習といえるのか疑問が募っていく。

振り返ってみると、社会福祉士が国家資格として登場してから、その専門性ととも

に、実習のあり方は長く問われている。そして、実習の中では、ケアワークの位置づけを明確に示さず、関わることこそ利用者を知ることといった経験主義を通し、その独自の専門性を見いだせずに来た。しかし、その専門性を示すために社会福祉士の実践からケアワークを取り除くという考えは、至極非現実的に思える。なぜなら、相談援助業務は、ただ面接室で利用者に向き合って行われるものだけではなく、利用者の生活の中に介入し、利用者に関わり、時に介護をしながらニーズを汲み取るといった方法があり、利用者の話を“きく”方法として、介護や関わりを“しながら”という実践が日常的に見られるからである。にもかかわらず、なぜ、社会福祉士の専門性を述べる時、また、専門職を育てる過程である実習教育を語る時、ケアワークとの差別化の議論が目立つのか。突き詰めれば、ケアワークとの対比がなければ社会福祉士の独自性、専門性は貫けないのかという問いに行き着く。

そこで本研究では、実習におけるケアワーク実践に関する議論を振り返ることにより、実習でのケアワークの捉え方、取り入れ方、それに伴う利用者との関わりについて概観していく。そして、その議論の背景にある状況について整理していく。さらに、実習教育、実習を巡る議論のあり方について整理し課題を抽出する。そのことで、これまでの議論が実習のあり方にどのように影響を及ぼし、これから、どのような議論を積み重ねることが、実習教育に有効かを考えていく。それらを通して、実習生の学びとして、利用者から遠い存在としての社会福祉士と括らないためにはどのような実習教育が求められるのか、実習教育に必要な議論とはどのようなものかを探求、考察していく。

## 2. 実習におけるケアワークの捉え方の変遷

### 2-1. 多様化する実習内容

実習は、将来社会福祉士の資格を有し、社会福祉士として現場で働くための人材を育てる機会である。しかし、実際の現場は「社会福祉士は何を行う資格・職種なのかが不明確な状況」（川上 2011:110）であり、その中で、「社会福祉援助技術を使ったソーシャルワーク実習体験を提供することが困難」（熊坂他 2009:161）といわざるを得ない。そのため、実際に養成校側、実習指導者ともに実習先で何をさせたら実習といえるのか、という迷いにつながっている。さらに、実習の目的は「ソーシャルワーカーという専門職の実践基盤となる価値・知識・技術を体系化した社会福祉援助技術（ソーシャルワーク）を学ぶ」（村田 2009:39）というように、曖昧かつ抽象度が高く定められている。そのため、利用者に関わることも、生活相談員に同行し会議に参加することも、他職種に話を聞き介護実践を見学することも、事務所で必要書類に目を通しておくことも、法人がもつ多（他）事業所を巡ることも、すべて社会福祉士の実習に関連してく

る。そのため、実習内容は、多様性がある一方、実習先の力量、プログラムに「お任せ」の色合いが濃いいといえる。それは、新カリキュラムに移行し、実習プログラミングが位置づけられた現在でも、それぞれの種別ごとの実習というよりは、法人内実習と捉えた方がしっくりくる場合がある。

## 2-2. 「ケアワーク実践ありきのカリキュラム」を見直す

わが国の社会福祉実践は、いわゆる入所型施設における施設処遇論として発展してきた面もあり、直接処遇とソーシャルワーク実践が峻別されず、渾然一体の実践として育まれてきた。それは、利用者との対面的な実践においてケアワーカーの役割が大きく、ケアワーカーとの連携が重要視されてきた事実からも理解できる。そして、実習生には必然的にケアワークを体験させることが当然視され、ソーシャルワーク体験は少なかったといえる（日本社会福祉士会 2014:39）。そのことは、旧カリキュラム時のテキストにおいても、「この現場実習のなかに介護業務や直接生活援助・指導業務の実習がある部分、組み入れられることは非常に有意義だと言わなければならない。そもそも、ケアワーカーとソーシャルワーカーは同じ領域で働く重要な協働者であるから、実習生もケアワーク実習を通してケアワーク業務に対する理解を深めることが大切である」（全社協 1996:10）と記されており、ケアワークの経験を肯定的に捉えていることがわかる。その結果、実習が終わってもその経験が実習生の中で強く残り、社会福祉士とは何の専門職か、ソーシャルワークとケアワークはどのように違うのかという問いだけが募り、その答えは明確にならない状態が続いた。そのような状況を鑑み、新カリキュラム導入により、ソーシャルワークとケアワークの差別化が謳われ、相談業務と関連業務がはっきり区別された。

さらに、高齢者領域では、従来のケアワーク中心の実習から、相談援助業務中心の実習へ移行することに前向きな傾向がみられた。それは、介護保険導入に伴い生活相談員の業務が「ケアワークからケアマネジメントへシフト」し、『『ニーズの把握』『入所契約の締結』『相談支援』『地域連携』といったキーワードで表現』（大西 2013:6）されるようになり、実習で示しやすくなったとされていることが影響している。しかし、そのことは、キーワードを示すことができるようになったにすぎず、実践、専門性の部分的理解にとどまっている。また、社会福祉士が何の専門職かを可視化する傾向が強まった分、「見せる実践＝動きがある実践」に重きが置かれ、「同行」訪問、「同行」面接といったように、「何かをする実習」から「何かを見る実習」に変化していった。そして、現在でも、具体的にどのように「行政、他機関、地域、家族等との調整や連携において関係法規や制度に則ったソーシャルワークの専門性」（大西 2013:6）<sup>(1)</sup>を伝えていくかは議論の余地が残っている。

### 2-3. ケアワークとの差別化の限界

実習におけるケアワークとの差別化にも限界が生じている。それは、相談機能、調整機能は、社会福祉士独自の機能ではないことに起因する。そして、その機能を社会福祉士か、他職種に求めるかの優先度と期待度は、種別、施設ごとに相違が生じている。このことは、熊坂が述べるように「相談機能と調整機能が一定の量と明確な形で業務の中に定着していない（ことを示す。さらに、）生活相談員のソーシャルワーク機能発揮への期待は他職種職員に強く、一方で直接的処遇業務への期待も持っていることが明らかとなった。つまり、生活相談員はやはり『何でも屋』を期待されているのである〔（ ）内筆者記載〕」（熊坂他 2009：174）。そして、相談員のそのような現状は自ずと実習内容にもリンクする。言うならば、実習でこれをしなければいけないという縛りはなく、「何をしても」よいということになる。そのため、ケアワークを実習内容に取り入れた方が現場の実情を反映しており、なおかつ、実習生に「何かをしてもらう」という点で実習内容に組み込みやすく、また、実習生も「何かをした」という感覚が残りやすいといえる。

### 2-4. 「ケアワークを実践する」実習から「見る」実習へーその課題ー

新カリキュラムにおける実習の教育内容は多岐に渡っており、限られた期間内ですべてをこなすことができるのかという教育側からの疑問が生じている。神波らは、「確かに、『見る（見学）』という実習では確立していて、触れてみましたので知っていますという意味での実習ならば可能かもしれないが、『見る』から『考える』という意味での実習では可能性は少ない」と述べた上で、「『考える実習』を可能にするためには、どこか一つに集中して掘り下げて実習を行うという選択肢もあっていいのではないか」、そして、「表面だけを見てこれが現場だと思い違いをする学生を生むことにもなる危険性を孕んでいる」（神波他 2013：18）として、一か所の現場に留まらず、法人内の多事業所を短期間ずつ体験する実習体系に疑問を投げかけている。そして、実際見せるにしても、事業所ごとのつながりを介護保険事業としてのつながりということだけではなく、生活を支える社会資源のつながりとしてどのように示していくのかは明確ではない。

### 2-5. ソーシャルワークの独自性を示す実習へーその課題ー

介護保険導入後の高齢者領域では、社会福祉士は、連携、協働概念のもと、ケアマネジメント機能に重点が置かれ、他職種の中でその独自性を示すことが強く求められた。そのことは自ずと、実習教育、実習内容にも影響した。そして、当然のようにケアワークとの差別化が謳われ、テキストにも反映されている。それは、旧カリキュラムにおい

では、「ケアワーカーも、当然のことながら、社会福祉領域の一専門職で、ソーシャルワーカーと同じ価値観に基づいてその業務を遂行しており、その過程ではソーシャルワークの知識・技術を用いている」（全社協 1996:10）とされ、新カリキュラムでは、「両者にはその専門職固有の方法があり、他の専門職の方法とは異なるものとして教育・指導されている」（社会福祉士会 2014 年:40）と記載され、ケアワークの捉え方の変化が明確に記されている。しかし、それぞれの専門性、固有の視点、方法とはどのようなものであるかは明確に記されていない。また、ソーシャルワーカーとケアワーカーはともに同じ社会福祉専門職として、共通の価値をもち得るはずであるが、その価値も、カリキュラム以降に伴い変化してしまったのであろうか。さらに、協働者としての存在もまた薄れたのであろうか。確かに、それぞれ独立した専門職ではあるが、区別しがたい現場の実情を見逃してはならない。

### 3. 実習におけるケアワーク実践の意義

#### 3-1. 現場の実情に即した実習

実際、福祉現場においては、「相談援助職が行うソーシャルワーク実践とケアワーク実践の関係性に関する議論を中心に、いまだ見解がまとまっていない状況にある」（上田他、2013:19）。そのような状況の中で、「ケアワークに必要な知識や技術に関わるカリキュラムが乏しい現状」（上田他 2013:16）は否定できず、福祉現場の実践と実習内容の乖離が生じている。それは、旧カリキュラム時代に竹内が述べた懸念（「ソーシャルワークに内包された関連技術としてなのか、介護実習の中で実施されている看護や介護に近いケアワークなのか…（中略）…現状のケアワークの学内教育は、その機能と構造を明確にしないままに動きだしている」（竹内、2004 年:177 頁）が拭い去れていないのではないかと危惧するところである。さらに、中村らの投げかけ（「今後のソーシャルワーク教育では、ソーシャルワークとケアワークとを統合的に理解するという合意を形成することから始めるべき」（中村他 2006:184）は、実習現場で消化しきれないまま存在し、個々の方法で、実習におけるケアワーク実践の組み込みが継続されている。

また、鴨志田は、「人と人が関わる場において、環境整備や身体介護、子どもの世話など、なんらかのケアワークは必ず存在する」（鴨志田 2007:65）と述べた上で、ケアワークの学びを期待する現場職員の声を拾い、また、「利用者の生活を支えるという視点」「介護を受ける側の体験を何よりも大切にする」という意図から事前授業に介護体験を意図的に取り組んでいる。さらに、竹内は、「『実践に役立つもの』という内容を伴う必要がある」（鴨志田、2007:76）として、介護技術の習得を目的とした内容でケア

ワーク学内実習を実施している。

### 3-2. 利用者理解のための、関わりとしてのケアワーク

黒田は、ソーシャルワークからケアワークをいわば切り離す新カリキュラムのあり方に異論を唱えている。それは、「たとえソーシャルワークを学ぶための実習といっても、入所施設においてその業務の中心となる直接生活支援（ケアワーク）と切り離して行われるソーシャルワークの学びには意味がない」（黒田 2010:44）というものである。そして、「社会福祉の学びのなかで現場実習のもつ意味は、まさにその利用者の思いを実習生自身の五感で直接感じ、援助者による実践を目の当たりにするところにある」（黒田 2012:44）として、利用者との直接的な関わりと、それに対しての実習生の感じる力に焦点をあてている。いわば、援助する人とされる人が同じ「人」であることを、現場で直接触れて感じることの大切さを説いている。すなわち、その現場にしか存在しない人や場所や時間を大切にするための関わりとしてのケアワークは「援助行為の一つ」であり、「ソーシャルワーク機能のみを切り取って示したり、教えたりすることは不可能」（黒田 2010:55）である。

そもそも、学生が現場で実習するにあたり大切なことは、利用者をどのように捉え理解していくかという視点である。すなわち、「実習の基礎となる利用者理解をどのような方法で行うかが重要」（神波他 2013:28）である。しかし、いずれの文献においても「ソーシャルワーカー固有の利用者理解の方法については、明言されていない」（土田 2013:83）。そのため、利用者理解の一つの方法としてのケアワークの位置付けもまた実習においては明確に示す必要がある。そのことについて土田は、「ケアワークが身体的介護を専門性の中核におきつつ、利用者の生活の全体性を支援するソーシャルワーク技術を要することを示す」と述べており、「狭義のソーシャルワークだけでは利用者のアセスメントが困難なこと、ケアワークにおいてもソーシャルワークの技術が求められることを示唆」している。そして、沖倉は、「施設職員全体としてのソーシャルワークの提供は、現実の支援を反映した提起である」（沖倉 2012:15）と捉えており、相談職、介護職に留まらず、施設全体のソーシャルワーク機能のリアルを見せることの意義を説き、そのことをもって実習生に伝える方法が求められると示している。それは、実習生がどのような実践を経験したとしても、ケアワーク主流のミクロな捉え方から、施設全体の機能として、その実践がソーシャルワークのこういった機能をさすのかといったジェネラリスト的な視点への変換が求められることを示している。

## 4. カリキュラム移行にともなう実習現場の状況と課題

### 4-1. 利用者との関わり方の変化

旧カリキュラム当時の文献では、「いわゆる『介護の実践』を通じて実習を深めてもらうことを徹底」（全国社会福祉協議会 1996：172）しており、実習でのケアワーク実践の取り入れは肯定的であった。しかし、新カリキュラムに移行し、「実習生に伝えなければならないソーシャルワークの内容がたくさんあり、…（中略）…ケアワークでもさせて時間を潰しておく」（日本社会福祉士養成校協会 2015：50）余裕はないとされ、ケアワーク実践をしてもらうことに否定的となった。

では実際、実習現場でケアワーク実践が取り除かれていく中、利用者との関わりによる時間の共有をどのように実践してもらっているのか、そして、単なる時間の共有に留まらず、その関わりを利用者理解につなげているのかみていきたい。

### 4-2. いつの時代も変わらない価値

日本社会福祉士養成校協会編集の文献では、新カリキュラムに移行しても「ソーシャルワークの援助の基本は、利用者を理解し共感すること」と示し、実習は、「利用者を理解し利用者の力を引き出せるような支援が、現場でどのように実践されているかを十分に体験できる絶好の機会」（日本社会福祉士養成校協会 2009：142-143）と表現している。それは、ソーシャルワークの起点は、利用者を主体として考え、利用者やそれらを取り巻く状況を理解することであり、いつの時代も変わらない利用者本位という価値に基づく実践であることを示している。

さらに文献では、「相談援助活動を可能にするための基本要件は人間関係の成立」（日本社会福祉士養成校協会 2009：143）の必要性が述べられており、関係を通しての援助実践を示している。それは、どのようなサービスが揃ったとしても、人が人を援助する際の関係づくりの重要性は変わらず、そのためにも、実習においては、人と関わり、人との関係を模索するプロセスを踏むことが求められる。

### 4-3. ケアワークからの脱却とソーシャルワークの見せ方—その課題—

カリキュラム移行に伴い、現場に一任していた実習内容から、より明確に「社会福祉士とはどういう専門職か」「どういう役割があるのか」を可視化しようとすることに比重が置かれた。そのため、ケアワーク等を通して利用者に触れ合い関わることから、社会福祉士の役割を明確に示し、具体的な実践としての個別支援計画作成を位置付けた。しかし、実習における個別支援計画と、ケアマネジャーのケアプランとどのように作成



プロセスが違うのか、すなわち、社会福祉士独自のプランニング方法、技術は明確になっていない。そのような状況の中で、個別支援計画を作成さえすればソーシャルワーク実習っぽくなると捉えられるようにもなった。そして、ケアワークを通しての利用者との触れ合いに時間を注ぐことが難しくなり、特に、特養のような介護現場では、「ソーシャルワークが埋没して見えにくい」（関西学院大学実践教育研究会 2014:47）ため、実習内容におけるケアワークとの差別化がより意識された。一時期、その内容が行き過ぎた傾向に現れ、利用者に触れることすら禁じられることもあったが、川上は、「ちょっとした身体接触程度のものはケアワークとは見なしていない」（川上 2015:28）と記し、ケアワークの過剰反応に警笛を鳴らしている。ただ、それが過剰反応であったにせよ、ケアワーク抜きに実習内容の提示をすることに現場で戸惑いがあったことは事実である。そして、何をもってソーシャルワーク実践を指すのかといった現場の不確かさは変わらない。

## 5. 実習現場にある『とりあえず』の実践

### 5-1. 明確にならない利用者との関わり方、過ごし方

新カリキュラム導入に伴い、実習生に伝えなければならないソーシャルワークの内容は整理され、多岐に及ぶことは明確になった（日本社会福祉士養成校協会 2015:49）。そして、旧カリキュラム時代に蔓延していた、とりあえず「ケアワークでもさせて時間を潰しておく」（日本社会福祉士養成校協会 2015:50）こともなくなった。しかし、カリキュラム上、社会福祉士の役割が明確になっただけで、実習先である現場は何か変わったのであろうか。さらに言えば、「何をしてもらえばよいか分からない」ままカリキュラムが移行され、ケアワークだけが取り上げられた。そのため、実習生は介護現場に身を置き、なぜ実践してはいけないのか明確に理解できないまま、ケアワーク抜きに利用者に出会う。そして、関わりの時間として利用者とは過ごす時間は提供されるが、どのように触れ合い、関わり、関係を築いていくかの『導（しるべ）』は示されていない。

実習生は、ケアワークという媒介がないことにより、会話を通して関係を築いていく。そして、初めての関わりに緊張をして会話が続き、どうしていいかわからない迷いに突き当たる。そのようなとき、言語コミュニケーションだけでなく、非言語コミュニケーションを通して相手の訴えをきこうとし、利用者との関係づくりのプロセスを踏んでいく。それは、さも、コミュニケーションを通して関係を深めているようであるが、利用者との出会いにおいて、十分な準備ができていない段階での「行き当たりばったり」の関係づくりともいえる。そこ（実習場面）に利用者がいて、業務を振り分けられず、することがなければ、会話をしようとするし、やり取りを続けようとする。しか

し、その場に慣れることと関係を作ることに目に見える明確な境界がなく、時間の経過とともに、相手のことをわかったような気にはなることができる。で、あるならば、この関係の深め方は、利用者本位という価値に基づく実践を伝えているということになるのだろうか。

## 5-2. 介護現場での社会福祉士実習－その課題－

実習では、社会福祉士の役割を見るために、カンファレンスに出席し他機関との交流を見る。そのような姿から、調整、連絡、連携の社会福祉士の役割を見出していく。しかし、社会福祉士の役割が可視化できるようになった半面、社会福祉士がいかに利用者理解を踏むか、一人の利用者にとことん向き合うか、利用者との関係の中でのジレンマと戦う姿を見ることは難しい。さらに、社会福祉士の役割を見せる実習内容は、利用者との関係づくりに重きを置く実習内容とリンクしがたくなる。なぜなら、どのように関わればいいのか、その初めの出会いの方法、技術、介護現場での過ごし方の詳細は、どこにも記載されていないからである。特に、介護現場で多数を占めるケアワーカーは、社会福祉士の実習生に何をしてもらったらいいのか悩ましいままである。

実際、現場職員は、こなすべく業務としての介護を実践しながら利用者に関わっている。そして、その関わりの中で、様々なニーズを捉えていく。一方、実習生は、業務の流れの中で、食事介助、入浴介助、排せつ介助、様々なケアワーク実践を目にしていくなため、実習生である自分も職員と一緒に何かしなければという焦りにつながる。もちろん、どのような状況下でも、利用者との時間に気持ちを注ぎ込むことはできる。そのような職員の慌ただしい動きも、日々の利用者が見ている景色として捉え、利用者を取り巻く環境について学ぶこともできる。しかし、その時間が、業務の合間の時間稼ぎ的に用意され、あるいは、何日も意図せず提供されたならば、利用者へ気持ちを注ぎ込むことは難しくなる。そして、実習生は利用者を目の前にしどろもどろし、介護職の関わりを見様見真似し、自分なりに関わり始め、慣れていく。さらに、一定時間が過ぎるとそこから離れ、社会福祉士の役割を見るために同行し、また、一定時間が過ぎると現場に戻り、計画を立てるといった課題をこなす。それは、関係を軸とした援助計画策定とは言えず、実習内容を手続きとしてこなしているに過ぎないのではないかと思える。

## 5-3. 意図した「関わり」の提供へ

利用者と援助者の面接室での初めての出会いは、インテークとされ、関係づくりに重きを置く段階として言われ続けている。一方、日常生活を送る利用者との何気ないやり取りは、具体的な学びがないまま「利用者とのコミュニケーション」の時間として提供

される。しかし、利用者との関わりは何の説明も受けず実践できるものなのか。その疑問に答えは用意されておらず、旧、新カリキュラムともに、「相談援助活動を可能にするための基本要件である人間関係」（日本社会福祉士養成校協会 2009:143）をどのように培うかは定かではない。そのため川上は、実習プログラミングの方法の中で、「実習生は接し方がわかりませんので、接し方のコツをある程度教えます。たとえば、どういふ話題がよいか、どんな交流の仕方ができるかなどです。…（中略）…もし、どうしても入居者とうまくかかわることのできない実習生がいた場合は、…（中略）…交流しやすい入居者を紹介します」（川上 2015:56）と記している。

もし、関わりというプロセスを大切にすれば、その時間、そのやり取りに注視し、専門的な「援助関係」を培っていく過程を支えていく必要がある。また、「交流しやすい入居者」とは何をもってそう捉えるのか。単に、会話が続きやすい人なのか、職員側の先入観が問われる。また、裏を返せば、その方以外は、交流が難しい方というレッテルを貼りかねない。確かに、会話を続けるためのきっかけを提供することも大切であるが、共同作業としてのコミュニケーションの意義を現場の実践を通して、その時々、丁寧に伝えていくことが求められる。また、関わるときの緊張感、不安、戸惑い、そして、喜びも含めて意図的に体感してもらい、人が人を通して支援する礎を、実習時間を通してより大切にしていく。そうすることで、「社会福祉士にふさわしい自分であるのか、というような自己覚知がとても重要な課題」（兵庫県社会福祉士会 2011:41）としてあがってくる。

利用者との関わりを環境を意図的に十分整えられた中で、実習生は、「利用者が何を感じ、考えているのかをありのままに感じとろうとする姿勢」（日本社会福祉士養成校協会 2009:142）の大切さに気づいていく。そして、目の前の利用者一人ひとりを大切にしたい気持ちにもつながる。それは、その場に慣れることによってコミュニケーションの基本を身につけるといふ経験主義ではなく、ソーシャルワークの起点として、利用者との関わりを意識するプロセスにつながる。

#### 5-4. 関わりを通しての実習生の模索

実習生にとって利用者との直接的な関わりは、自分を省みるプロセスにもなる。つまり、関わりを媒介が「介護」なら介護技術の不勉強を悔い、「会話」を通してなら言語コミュニケーション能力が十分でない自分への反省をしていく。そうした実習生の反省から、事前学習の段階で介護技術を意図的に取り入れている養成校もある<sup>(2)</sup>。しかし、その取り組みは、介護技術の向上のための手段ではなく、介護現場において介護が「できない」より「できる」方がよいという実習生側の安心材料に過ぎないように思われる。そして、関わりのための「できる」に越したことはない介護技術の習得は、ケアワ

ークとの差別化を生じさせやすくする。

また、多くの実習生は、実習始まり当初の不安と緊張が、利用者とやり取りを繰り返したことによって喜びへと変化していく。そして、そのようなやり取りを通して、自分の気持ちの変化を確認していく。もはや、関わりとしてのコミュニケーションは、利用者理解のための方法ではなく、やり取りができるようになるための目的と化していく。時に、そのような「できる」ようになった自分を「成長」という言葉で括っていく。だが、そのような変化を次なる実践に意図的に駆使するというよりは、関わりに慣れたということに留まり、専門的な関わり、自己活用へとつながったかは定かではない。さらには、力動的な相互作用としての援助関係に向けての気づき（築き）、交互作用への視点の広がりまで及んでいるかとなると疑問を呈するところである。

### 5-5. 「とりあえずの実践」という省みる対象

いわゆる三大介助がどれだけできるようになったかが、実習の成果と思われた時もあった。そうなってくると、もはや社会福祉士の実習とは言い難い。そして、社会福祉士の存在意義はわからいままである。そのため、新カリキュラムにおいては、社会福祉士の役割を見せることに重きを置いたが、そもそも、ケアワーク実践を重ねると、なぜ、社会福祉士の役割が見えにくくなるのか、また、ケアワークありきの実習の時も「介護実践の方法」を伝えてはいたが、利用者との関わり大切さや難しさ、利用者を理解するプロセスを丁寧に伝えてこなかったのではないかと思われる。だからこそ、現場では、事前に学んでいない介護実践を実習生に「とりあえずさせてみる」という発想につながったのである。もちろん、それを黙認していた養成校の存在も大きい。

であるならば、実習内容にケアワークを組み込むかどうかではなく、とりあえず関わってみる、とりあえず介護をしてみるといった経験主義に問題、課題があったといえる。もし、ケアワーク実践がなくなったとしても、とりあえず利用者に関わってみる、そのためにコミュニケーションをとってみる、という考えが根付いたままでは、何をしたとしても、社会福祉士固有のもの見方、考え方は培ってこない。そして、利用者理解するプロセスを意識して歩んでいくことは難しくなる。

### 5-6. ケアワークをどのように捉えるのか—何のためのケアワーク実践か—

「今の実習生はいいな、私の時は、介護ばかりさせられた」という語りを実習指導者の方からよく聞く。しかし、今のカリキュラムは何が良くて、以前は、何もかもが良くない実習内容だったのだろうか。よくよく考えると、「介護ばかり」と表現することに、その当時の学びの希薄さがわかる。それは、何のための介護であり、それをしたことによって利用者の何を理解でき、そして、次の実践にどのように関連付けられるの

か、自分の中で何を学びとして得たか、それが意識に上ってこなければ、単なる介護経験を積んだ実習として終わっていくだろう。以前のカリキュラムは、そうした「何のために」という根拠の部分が十分でなかったと思われる。そのため、社会福祉士とは何か、その役割を見せることに焦点をしばっている現在の実習がよく映っているのかもしれない。それは、ソーシャルワークをわかりやすく示した実習内容ともいえ賛同も得やすい。

しかし、京都社会福祉士会発行の実習資料集では、実習指導者の声として次のような声が上がっている。「実際の業務の中で、相談援助実践と介護実践と切り離すことはできません」、「そもそも介護が必要な方が生活している施設であるため、ケアワークを実習から取り除くことはできません。当施設でのケアワークの位置づけをしっかりと伝えていきます」、「介護をすることで、利用者さんを知るチャンスになると思う時があれば、単なる時間稼ぎのように感じる時もあります。何をしてもらうにも、根拠が必要であると思います」。

上記の内容から、ただ、ケアワーク実践をするという経験ではなく、何のためにその実践があるのか示していれば意義ある取り組みといえる。例え、カリキュラム移行によって、ケアワーク実践を取り除かれたとしても、ねらい等が明確ならば、堂々と実習内容に組み込むのも「あり」である。当然、事前学習で介護技術を学んでいないため、安全面での配慮は最大限必要である。大切なことは、カリキュラムが変わったから、ただ、そのまま従うということではなく、カリキュラムが変わったことによって、自分たちはケアワークをどのように捉えてきたか、そして、利用者を理解するプロセスをどのように伝えようとしているかといった「主体は利用者の視点」の確認である。

さらに、可視化できる社会福祉士の役割とともに、可視化しづらい利用者理解とのつながりを実習生に伝えていく方法を具体的に、現場ごとに議論を重ねていく必要がある。そのことが、カリキュラムという枠を使いこなす実習生を指導する者の役割である。

## 6. 求められる実習教育とその議論

### 6-1. 学びの礎となる「職場実習」～「ソーシャルワーク実習」へ

新カリキュラムでは、「ソーシャルワーク」を見せることに重きが置かれ、各段階（職場実習－職種実習－ソーシャルワーク実習）を経ての実習内容を組み立てている。しかし、旧カリキュラムの「現場実習」の中の、そもそもの「利用者との関わりの段階」の内容を何も精査していないため、実習現場で「とりあえず」関わってみるといった経験主義は根付いたままとなっている。

今後、そういった状況を回避していくためにも、最初の「職場実習」段階でどのように、利用者や現場を理解していくか、その方法論を具体的に示していく必要がある。また、学びの礎となる「職場実習」段階は、利用者と関わり、その場に慣れ、利用者から見える景色を想像し、利用者の置かれている環境理解をし、といったように、とてもこなす内容が多くなる。だが、それだけの比重が置かれた取り組みになっているかは疑問であり、今後の課題といえる。当然、その段階においては、ケアワークをどのように捉えていくかも議論の対象となる。

さらに、援助過程をより具体的に知る「ソーシャルワーク実習」段階の個別支援計画（プラン作成）は、プラン対象者と十分な関わりを持たない状態でのプラン作成の可能性はある。それは、「職場実習－職種実習－ソーシャルワーク実習」で同じ場所、同じ利用者と関わっているかは問われないため、言うならば、援助関係なきプラン作成になっていないかという懸念につながる。そして、旧～新カリキュラムを通して、利用者との関わり、理解の方法、情報収集のあり方が、直接的に利用者に触れる「介護実践」から、利用者に触れない「会話」に変わり、対利用者ではなく、プラン作成のために必要な「記録」の閲覧に変わったにすぎないのではないかと。そうであるならば、いつの時代も利用者理解という実践の根幹は学びきれていないということになる。そして、そのことに気づかず、ケアワークだけを取り除いたとしても、「ケアワークをさせる、させない」といった小手先の体験論が続くにすぎない。

そのためにも、実習教育、内容の根幹に、実践の礎である利用者理解を強固に据え、実習生が利用者との関わりを通して、関係を意図的に築き、その訴えの背景にある思いや生活歴を汲んでいけるような専門的な方法、技術、コミュニケーションのあり方を具体的に指導していかなければならない。そして、社会福祉士固有の視点、実践方法を突き詰めていくことが求められる。もし、それが明確に示しづらいのであれば、そのことを議論の対象にすべきである。

## 6-2. 各段階（職場実習－職種実習－ソーシャルワーク実習）のつながりの提示

対人援助、相談援助の専門職として利用者理解は欠かせない。にもかかわらず、実習生から、社会福祉士が利用者から遠い専門職と捉えられるのは、職場実習を礎に据えた、職種実習、ソーシャルワーク実習になり切っていない中で、ケアワークとの差別化に固執し、社会福祉士の専門性の可視化に力を注いだ結果、利用者から離れたところでの動きが目立ち、そのように映ったのではないと思われる。それは、社会福祉士の専門性を見せようとするほど、利用者と実習生の距離は遠くなり、利用者の存在を捉えきれなくなるおそれがあることを示している。それが、今の実習現場であり、その実際に、いかに向き合っていくかも問われる。そして、たとえ、実際の業務が直接的な

関わりが少ないとしても、社会福祉士の業務と利用者の生活がどのように関連しているのか、各段階のつながりを提示し、実習生なりに咀嚼できていれば、そのような解釈は生じない。そのためにも、「利用者がいるところ」からの社会福祉士業務の実際を伝えていく。

それは、実習生が「介護をする、しない」どちらかではない。また、現場ではその差別化は難しい。であるならば、その現状から離れて、社会福祉士の専門性だけを実習生に「見せよう」としても、それは、利用者から離れた実践であると言わざるを得ない。そこに利用者がある。その利用者を理解する、大切にすること。その福祉としての共通基盤のもとに、ケアワークを代表する他職種との協働があり、お互いの尊重があり、その上で、それぞれの専門性としての花が開いていくのではないか。もはや、「つながり」の専門職としての社会福祉士が、何かを切り離して自らの専門性だけを見せようとすることに無理があり、率先して「つながり」の中に実習生を導き、その曖昧な専門性を味わってもらうことも社会福祉士実習の醍醐味である。

## 7. おわりに

新カリキュラムが始まってすぐの巡回指導時、実習指導者から、「先生のところ（養成校）はケアワーク『あり』ですか？『なし』ですか？（実習内容に組み込むかどうか）」と問われる機会が幾度となくあった。筆者は、その質問に違和感を覚え、社会福祉士とは現場にとってどの位置にいるのだらうと考えたことを記憶している。それは、「ケアワークとは、実習生にとって『あり』か『なし』かの実践なのか」という疑問につながる。そして、その実践が利用者にとって必要であり、そのために実習でも内容に組み込む必要があるならば、当然「あり」である。そもそもの「何のために」がなく、「とりあえず」であれば「なし」であり、それは、どの実践でも同じである。そのため、今後も、「利用者の生活を支えるために」という視点をもって、実習指導者とともに実習内容を模索していきたい。

最後に、介護保険導入に伴って、社会福祉士とケアマネジャーの業務内容、役割の違いも言われ始めた。しかし、その差別化については、ケアワークほど議論の対象になっていない。それは、なぜなのか。そして、制度の流れに便乗し、社会福祉士という名の「介護保険従事者」を育てることにすり替わっていくのではないかという危惧が募る。そのためにも、人の生活を支える専門職としての社会福祉士を育てていく実習教育が今後も求められる。

## 注

- (1) 大西は、全国老人福祉施設協議会（2011）『特別養護老人ホームにおける介護支援専門員及び生活相談員の業務実態調査研究報告書サマリ』を用いて、生活相談員の職責、専門性を述べている。
- (2) 鴨志田美幸（2007）「ソーシャルワーク教育におけるケアワークの必要性－本学における“介護技術”の取り組み－」『人間福祉論集』を参照。ただ、全社会福祉士養成校の中で、何校が介護技術の取り組みをしているかは定かではない。また、新カリキュラムにおいては、事前学習において介護技術を習う時間は組み込まれておらず、あくまでも、養成校ごとの独自の取り組みである。

## 文献

- 一般社団法人京都社会福祉士会資格支援事業部実習班（2015）『社会福祉士 実習指導確認資料集』。
- 一般社団法人日本社会福祉士養成校協会（2015）『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト第2版』中央法規出版。
- 上田正太・岡田進一・白澤政和（2013）「特別養護老人ホームの生活相談員が行うソーシャルワークとケアワーク実践の両立性に関する研究」『厚生指標』第60巻 第13号。
- 大西次郎（2013）「特別養護老人ホームにおけるグリーンケア－ソーシャルワークの視点から－」『佛教大学大学院社会福祉学研究科篇』第41号。
- 沖倉智美（2012）「障害者支援施設における個別支援計画作成を参考する－地域生活移行支援を視野に入れて－」『ソーシャルワーク研究』38-2。
- 川上賢蔵（2011）「相談援助実習における実習内容に関する一考察－入所型生活施設における実習指導者の職種からみた業務内容との関係性について－」『社会関係研究』第17巻 第1号。
- 鴨志田美幸（2007）「ソーシャルワーク教育におけるケアワークの必要性－本学における“介護技術”の取り組み－」『人間福祉論集』。
- 関西学院大学実践教育研究会編（2014）『ソーシャルワーク実習プログラミングワークブック』みらい。
- 熊坂聡・舟越正一・庄司尚美（2009）「特別養護老人ホームにおける生活相談員の業務のあり方について－ソーシャルワーク機能に基づく生活相談員の業務分析から－」『山形短期大学紀要』41。
- 黒田由衣（2010）「社会福祉士実習における直接生活支援（ケアワーク）の意義－学生の実習日誌を通して－」『同志社大学』。
- 黒田由衣（2012）「施設職員が伝える援助者像－ケア現場での実習記録へのコメントから－」『ソーシャルワーカー論』ミネルヴァ書房。
- 公益社団法人日本社会福祉士会（2014）『社会福祉士実習指導者テキスト第2版』中央法規出版。
- 公益社団法人日本社会福祉士会（2015）『社会福祉士実習指導者のための相談援助実習プログラムの考え方と作り方』中央法規出版。
- 神波幸子・伊藤春樹・佐々木政人（2013）「新カリキュラム導入に伴う社会福祉士実習の変化」『愛知淑徳大学論集－社会貢献学部篇－』第3部。
- 社団法人日本社会福祉士養成校協会（2009）『社会福祉士 相談援助実習』中央法規出版。
- 全国老人福祉施設協議会（2011）『特別養護老人ホームにおける介護支援専門員及び生活相談員の業務実態調査研究報告書サマリ』。 [www.roushikyo.or.jp/contents/pr/proposal/detail/19?...fld...](http://www.roushikyo.or.jp/contents/pr/proposal/detail/19?...fld...)
- 竹内美保（2004）「社会福祉士実習教育におけるケアワーク概念規定の検討」『研究紀要』第7号。
- 土田美世子（2013）「ソーシャルワークとケアワークの共通基盤－ケアを鍵概念として－」『龍谷大学社会学部紀要』43。
- 中村敏秀・相澤哲（2006）「わが国におけるソーシャルワーク教育とその課題」『長崎国際大学論集』第6巻。
- 日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会（1996）『新・社会福祉施設〔現場実習〕指導マニュアル』社会福祉法人全国社会福祉協議会。
- 兵庫県社会福祉士会監修／高間満・相澤譲治編（2011）『ソーシャルワーク実習－養成校と実習先との連携のために－』久美。
- 村井美紀（2013）「実習教育から求められる相談援助演習教育への期待」『ソーシャルワーク学会誌』第



27号

村田美由紀（2009）「社会福祉専門職における学習課程と支援に関する一考察－介護福祉士から社会福祉士を目指す学生の現場実習・資格取得に焦点をあてて－」『共栄大学研究論集』第7号.

## Issues in Social Worker Training Regarding Care Work and Understanding of The Clients

Shoko Shiota

---

The content and practices of training in the new curriculum for social workers emphasizes teaching the trainees the duties and roles of certified social workers. It has turned away from the inclusion of hands-on practicum care work with the clients. Although the goal is to encourage trainees to interact and build relationships with their clients without having practiced care work. There are no clear standards or guidelines for approved methods for how to appropriately and effectively interact with clients or gain a better understanding of the clients. Hence, the training needs a discussion about the methods and perspectives by which certified social workers gain an understanding of the population that they serve rather than obstinately trying to differentiate it from care work. Moreover, the training environment should place great value on trainees' interactions with clients to create respect for the unique features of both social work and care work, which does not simply mean the removal of care work from the training content.

**Key words** : Social worker training, Care work, Understanding of the clients